大正國語讀本

修正版

巻五

375.9
H019
資料室

42017
教科書文庫
4
810
41-1918
200030
2241

資料室
375.9
H019

大正七年十二月二十壹日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

係科孝一編 修正版

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大学 教 38327

大正國語讀本（修正版）卷五

目次

一 月雪花その一……芳賀矢一……一
二 月雪花その二……一……六
三 春宵漫歩……夏目漱石……一一
四 母に上る（候文）……佐久間啓……一九
五 杉田壹岐……室鳩巣……二三
六 かりがね（韻文）……島崎藤村……三〇
七 佐渡が島……尾崎紅葉……三二
八 越後より東京に（候文）……竹越三叉……四〇

九　信長論……中村孝也…四四
一〇　豐臣秀吉……（古人評論）…五二
一一　武士道……藤岡作太郎…五七
一二　丈夫の吟（韻文）……金崎賢…六一
一三　オリンピアの回顧……黒板勝美…六二
一四　ルーヴル美術館……櫻井鷗村…七〇
一五　紐育の四大橋……原田棟一郎…七七
一六　蒲生君平と小澤蘆庵……瀧澤馬琴…八五
一七　天明調（韻文）……九四
一八　大鳴門のながめその一……久保天隨…九六
一九　大鳴門のながめその二……一〇〇

二〇　大鳴門のながめその三……一〇二
二一　日蓮上人……高山樗牛…一一一
二二　元寇その一……三宅雄二郎…一一七
二三　元寇その二……一二三
二四　浮島原の對面……（義經記）…一三〇
二五　空ゆく雁……（曾我物語）…一三四
二六　松葉仙人……（十訓抄）…一四三

廣島大學圖書館

大正國語讀本（修正版）卷五

一　月雪花その一

芳賀矢一

煌煌たる活動の日の光、西に沈めば、玲瓏たる一輪の月、休息の夜を照す。月の光は溫和で、日光のやうに峻烈ではない。日は赫々として仰いで見ることも出來ないが、月は眺めて親しみ易い。太陽が一たび出れば、羣陰皆影を伏して、大小の有象・無象悉く照破されるが、月輪は萬象を一つに包んで、貴賤・貧富の差

別を失はせて了ふ。月の光は慰安の光である、慈愛の光である、炎熱を伴なはない清冷の光である、皎潔無垢・崇美と稱ふべき、やさしい光である。休息・安靜の夜には最もふさはしい。この光に對しては、誰しも人生の慰藉を感ずる。詩的情緒は油然として涌く。晝の間は猛獸と鬪つて居る熱帶の野蠻人でも、月前の歌舞に終日の勞苦を忘れる。熱帶の椰子の影、寒地の冰の家、眺める人の心々は違ふであらうが、隈なく世界を照す月光の、人の胸懷にしみ渡る事は、恰もその影の、千草の露の玉毎に宿るやうなものである。「*うちむかふ月は一つの影ながら、うかぶはちぢの思なりけり。」である。

*うちむかふの歌　荷田蒼生子の歌。

東西・古今、悲喜・哀歡の情熱は幾萬回となく、幾億回となく、この光に向つて訴へられた。これを嗟歎し、これを吟咏した詩歌の感吟は、世界各國の言語に充ち滿ちて居る。天文學者は云ふ、「月は地球の衞星で、全く死んだ冷塊である。」と。この冷たい光が、古往今來どれ程の暖みを人間に與へたか、又現に與へてゐるか。月は永久に人間の良友である。

雪は月よりも一層冷たい。貧富・貴賤の差別なく、そ

の純潔の色を以て乾坤を一つにすることは、月に似た點が多い。高樓・茅屋も皆同じ色に埋められる。「花ならば咲かぬ梢もまじらまし、なべて雪降るみ吉野の山。」といふやうに、眼に入るもの、悉くその下に包まれてしまふ。「三千世界銀成色、十二樓臺玉作層。」の美觀は、一切の人間界の醜を掩ひ去つて、人をして廣寒宮裏に在るの感を抱かしめる。天から落ちて來るこの純白な色に比べては、地上の花も甚だしく汚く感ぜられるのである。霏々と散り、紛々と飛んで、唯一條の川水を殘して、山といはず、野といはず、また

花ならばの歌　新續古今集、僧仙覺の歌。

三千世界銀成色の詩　唐の詩人、白樂天の詩句。

廣寒宮　月の中にあるといふ宮殿。

たく中に瓊玉を敷く莊嚴の觀は、眞に人目を眩せしめるのである。よしや薪炭の料に乏しい貧家の庭でも、美しいといふ感じは少しも變らぬ。花・紅葉色色のながめはもとより美しいに相違ない。花の散つた後の新綠の色も目の覺めるやうな心持がするが、考へれば、花も青葉もない冬枯の時に、地上の萬物がこの銀色に掩はれるのは、眞に對照の妙、變化の奇、造化の巧を盡したものではないか。一年中、蓮の花の開いて居る極樂淨土は、決して我等の世界程樂しいものではなからう。

極樂淨土　佛敎に、衆苦なく諸樂を受くる國。

二　月雪花 その二

雪に埋れた銀世界が終つて、再び百花爛漫の美を見ればこそ、春の價値は一層高くなるのである。月や雪は唯一色である。花のさまざまどれを見ても美しいのが、四季につれて咲きかはり、咲亂れるのは、人生としてはあまりに贅澤な感じもする。花は美しい色の外に、かうばしい匂さへ有つて居る。我等の食用の爲に作つた菜や大根の花でも、無限の詩趣を備へて居る。富貴の庭園に培ふ花の價を生じたの

は無理はないが、山の花、野の花、いづれも月や雪と同じ樣に、一文錢を要せぬのである。人世に花なくんば、どれほど寂寞を感ずるであらう。閑寂を旨とする茶室の內にも、牀の間に一輪の花は必要である。これは寧ろ花を貴んで、その濫用を愼んだのである。棺槨を飾るにも花を以てし、墓前にも花を供養する。人は死んでも花を忘れぬのである。月雪の眺は、その皎潔を愛し、その淸淨を貴ぶが、花はその艶麗・華美を以て人生を飾り、人心を慰めるのである。花やぐ・花やか・花々し・華美・華麗・華奢等の語は皆花に基づい

花をしの歌　年ふれば齡は老いぬ、しかはあれど、花をし見れば物思もなし。（古今集、藤原良房）

山櫻の歌　新古今集。扶資王の母の歌。

冬ながらの歌　古今集、清原深養父の歌。

た語である。古今・東西の詩歌は擧げるだけ愚である。余はただ「花をし見ればもの思もなし」といふ古歌を以て、總べて總括し得べしと信ずる。

月・雪・花三つのながめは、各その特長がある、いづれを前、いづれを後といふことが出來ぬ。

山櫻花の下風吹きにけり
木のもとごとの雪のむらぎえ

これは花を雪にたとへたのである。

冬ながら空より花のちりくるは
雲のあなたは春にやあるらむ

笠は重し云云　謠曲、葛城の句。

これは雪を花にたとへたのである。

笠は重し、吳山の雪、鞋はかんばし、楚地の花。肩上の笠には無影の月を傾け、檐頭の柴には不香の花を手折る。

これは雪を月と花とにたとへたのである。花を賞して月を愛せぬ人は無い。月・花を愛して雪を賞でぬ人も無い。

思へば、世界の一部には全く花を知らぬ國もある。一年中氷雪に鎖されてゐるアイスランドでは、氷は卽ち人の家である。この地方の人には寸紅の目を

Iceland

樂しましめるものも無い。又これに反して、全く氷雪を知らぬ人もある。一片の布を纏うて生息する熱帶の住民は、瓊玉を綴る奇觀は見たことがない。瓦斯・電燈の光に不夜城の觀を呈して、夜更を知らぬ繁華な倫敦の住民も、秋・冬の半年は、美しい月の光を見ることが出來ない。我等日本人が、昔も今もこの三つの眺を擅にすることを得るのは、眞に天賦の幸福ではあるまいか。

月・雪・花の眺は、古人の歷史が加つて一層の感興が增す。「世々を經てながめし人の數にまた、我をもゆる

世々を經ての歌　伊藤仁齋の歌。

年々歲々云云　唐劉廷芝の代悲白頭翁上の詩中の句。

せ秋の夜の月」。月は古來の歷史を照す鏡である。「年年歲歲花相似、歲歲年年人不同」。人生の感は花を見てます〳〵繁く、雪を見ていよ〳〵多い。二千五百年以來、月・雪・花三つの眺を有し得たる我等祖先の遺蹟は、如何に多くの感興を我等に傳へたるよ、如何に多くの追慕を我等に催さしむるよ。（月雪花）

三　春宵漫步

夏目漱石

山里の朧月夜に乘じてそぞろ步す。觀海寺の石段を登りながら、「仰數春星一二三」といふ句を得た。余

は別に和尚に逢ふ用事もない。逢うて雜話をする氣もない。偶然と宿を出て、足の向くにまかせてぶらぶらするうち、つい此の石磴の下に出た。しばらく「不許葷酒入山門」といふ石を撫でて立つて居たが、急に嬉しくなつて登り出したのである。

石段を登るにも骨を折つては登らない。一段登つて佇むとき、何となく愉快だ。それだから二段登る。二段目に詩が作りたくなる。默然として我が影を見る。角石に遮られて三段に切れてゐるのは妙だ。妙だから又登る。仰いで天を望む。寐ぼけた空の

五山
建長寺。
圓覺寺。
淨智寺。
淨妙寺。
壽福寺。

奥から小さい星がしきりに瞬をする。句になると思つて又登る。かくして余はとうく上まで登り詰めた。

石段の上で思ひ出す。昔鎌倉へ遊びに行つて、所謂五山なるものをぐるく尋ねて廻つた時、たしか圓覺寺の塔頭であつたらう、やはりこんな風に石段をのそりくと登つて行くと、門内から黄色な衣を着た、頭の鉢の開いた坊主が出て來た。余は上る、坊主は下る。すれ違つた時、坊主が鋭い聲で「何處へ御出でなさる。」と問うた。余は只「境内を拜見に。」と答へて

同時に足をとゞめたら、坊主は直に「何もありません
ぞ。」と言ひ捨てゝすた〳〵下りて行つた。　あまり洒
落だから、余は少しく先を越された氣味で、段上に立
つて坊主を見送ると、坊主はかの鉢の開いた頭を振
立て振立て、遂に姿を杉の木の間に隱した。　其の間
かつて一度も振返りはしない。　成程禪僧は面白い、
きび〳〵して居るなと、のつそり山門を這入つて見
ると、廣い庫裡も本堂もがらんとして、人影はまるで
ない。　余は其の時に心から嬉しく感じた。　世の中
にこんな洒落な人があつて、こんなに洒落に人を取

扱つてくれたかと思ふと、何となく氣分が晴々した。
禪を心得て居たからといふ譯ではない、禪のぜの字
も未だに知らぬ、唯あの鉢の開いた坊主の所作が氣
に入つたのである。
かうやつて、美しい春の夜に、何等の方針も立てずに
歩いてゐるのは實際高尚だ。　興來れば興來るを以
て方針とする。　興去れば興去るを以て方針とする。
句を得れば得た所に方針が立つ。　得なければ得な
いところに方針が立つ。　しかも誰の迷惑にもなら
ない。

「仰數春星一二三」の句を得て石磴を登り盡した時、朧に光る春の海が帶の如くに見えた。山門を入る。絶句は纏める氣にならなくなつた。卽座にやめにする。

石を甃んで庫裡に通ずる一筋道の右側は岡躑躅の生垣で、垣の向ふは墓場であらう。左は本堂だ。屋根瓦が高い處で幽かに光る。數萬の甍に數萬の月が落ちた樣だと見上げる。何處やらでしきりに鳩の聲がする。棟の下にでも居るらしい。

雨垂落の處に妙な影が一列に並んでゐる。木とも

又平　大津繪の祖。元祿頃の畫家。

見えぬ、草では無論ない。感じからいふと又平のかいた鬼の念佛が、念佛をやめて踊つてゐる姿である。本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つて居る。其の影が又本堂の端から端まで一列に行儀よく並んで踊つて居る。朧夜にそゝのかされて、鉦も撞木も奉加帳も打捨てゝ、誘ひ合せるや否や此の山寺へ踊りに來たのだらう。

近寄つて見ると、大きな覇王樹である。高さは七八尺もあらう、絲瓜ほどな青い胡瓜を杓子のやうに壓しひしやげて、柄の方を下に、上へ〳〵と繼ぎあはせ

たやうに見える。あの杓子がいくつ繋がつたらお仕舞になるのかわからない。今夜のうちにも廂をつき破つて屋根瓦の上まで出さうだ。あの杓子が出來るときには、何でも不意にどこからか出て來て、びしやりと飛び付くにちがひない。古い杓子が新しい小杓子を生んで、その小杓子が長い年月のうちにだん〳〵大きくなるやうにはおもはれない。杓子と杓子の連續が如何にも突飛である。こんな滑稽な樹は、世の中にたんとあるまい。しかも澄ましたものだ。（鶉籠）

昨晩　嘉永六年六月四日。

四つ時　亥の時、今の午後十時。

七つ時　寅の時、今の午前四時。

松輪　浦賀水道の西側。

四　母に上る

佐久間啓

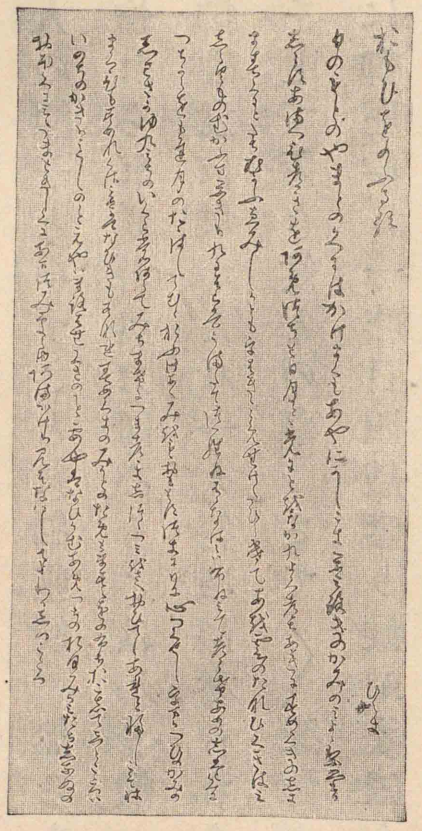
日々暑き事に御座候へども、何の御變も入らせられず候か。私事、あまりあまり達者にて、昨晩、四つ時も過ぎ、浦賀まで著いたし候まゝ、御安心願上候。今朝早く起き候うて、山に登り、渡來の船ども一見致し候處、かねて聞きおよび候とほり、大そうなるものに御座候。都合四艘の處、二艘は蒸氣船と申すものにて、火の力にて風に逆ひ候うても、差支なく走り候船に御座候。一昨日七つ時前の頃、松輪と申す邊に、帆影

Corvet

見ゆるなど沙汰し候うち、矢の如くに、港内に入り來り候由。今朝見候へば、陸より十七八町も隔り候處に、一艘これありべットと申す船にて、大砲、左右に二十四挺、艦に二挺、都合二十六挺備へ候。船に御座候。その並びに、六七町隔てゝ、蒸氣船これあり、又六七町隔てゝ、蒸氣船、又、六七町離れて、

佐久間象山

初の如き船これあり候。蒸氣船は、いづれも、殊に大きく御座候様見え申し候。とても、かれと爭ふには、私などのかねて申し居り候とほり、こなたにも、大船をかれと同様に拵へ、大砲をも、同じく澤山に作り候上ならでは、出來申さず。この度も、大いに見侮り候うて、小船十五六艘おろし、一艘に十人ばかり乗



佐久間象山筆蹟

り候もこれあり、五六人なるもこれあり、港口、處々乘りあるき、繩を下げて、海の深淺を測り、剩へ浦賀の燈明臺と申す邊に上陸致し、悠々見物致し候體、傍若無人の樣子と申すことに御座候。然るを、*奉行はじめ、怖れられ候か、與力・同心もこはがり候か、それが、上の御趣意に候か、たれ一人咎め候者もなく、唯見ぬふりをして置き候との事。さて〳〵、遺憾この上なき事に御座候。一昨日四艘參り候が、なほあと四艘參り候はむと承り候。まづ至つて穩かなる取扱に候へば、この度は何事もこれあるまじく候。公邊の御挨拶も、早速には相濟み申すまじく、「いづれ盆前に片づき候はば宜し」など、この土地の者も申し居り候。私も、また出で候とも、この度は、一兩日中に罷り歸り候心得に御座候。さりながら、今少し穿鑿仕りたき事これあり候間、大凡わかり候事ども認め*御屋敷へ差出し候ため、附人の内、一人差戻し候まゝ、大略の事御聞かせ申上候。めでたくかしこ。

奉行　浦賀奉行。

御屋敷　信濃松代藩主をいふ。當時の藩主は眞田幸貫。

五　杉田壹岐

室鳩巣

寛永の頃、越前故*伊豫守殿の家老に杉田壹岐といふ

伊豫守　松平忠直。德川秀康の長子。

ものあり。もとは足輕なりしが、其の身の材をもて微賤より登庸せられて、厚祿を受け、國老に列しけり。壹岐性忠亮にして、骨鯁なり。常に顏を犯し直言して、君の過を匡救することを忘れず。

或時、伊豫守殿在國にて、鷹狩し、晡時に及んで歸城あり。家老どもいづれも出で迎へしに、伊豫守殿ことのほか氣色宜しく、「今日若者どもの働いつにすぐれて見えつ。あれにては萬一の事ありて出陣すとも、上の御用に立つべしと覺ゆるぞかし。その方どもも承りてよろこび候へ。」とありしかば、家老どもいづ

れも「御家のため何よりめでたき御事にて候。」といひけり。

この時、壹岐は末座にありけるが、獨り默々として居たりしを、「何とか云ふ。」と暫く見合せられしが、こらへ兼ねられ、「壹岐は何と思ふ。」と仰ありしに、壹岐「只今の御意承り候に、憚りながら歎かはしき御事に存じ候。當時、士ども御鷹狩の御供に出で候とては、先にて御手討になり候はむも計り難く候とて、妻子と暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて思ひ付き奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしと

は存ぜず候。それを御存じなく、賴もしく思召さるとの御意こそ愚なる御事にて候へ。」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じけり。

何某とかや云ひしもの、伊豫守殿の刀持ちて側に居たりしが、壹岐に「座を立ち候へ。」と云ひしを、壹岐聞きて、其の人をはたと睨み、「いづれもは御鷹野の御供して、鹿・猿を逐うて駈廻るを御奉公とす。此の壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な。」とて、其のまゝ脇差を拔いて後へ投げ捨て、伊豫守殿の側に進み寄り、「只御手討にあそばされ下され候へ。空し

何某　伊藤玄蕃。

くながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はむよりは、只今御手にかゝり候はむ方遙かに勝り候ひなんず。」といひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何ともいはで奥へ入られけり。

其の跡にて、外の家老共壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは尤もにて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸ありしに、御氣先を折られ候ことは、遠慮もあるべきことにこそ。」といひしを、壹岐「君へ諫を申上候に御機嫌を考へ候うては、よき折とてはなきものにて候。今日はよき序

とこそ存じ候へ。其の上、某事は御取立のものにて候へば、各とはわけの違ひたるものにて候。御手討に逢ひ候うても其の分の事にて候」と云ひければ、家老ども皆々感じ合ひけり。

軈て家に歸りて、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日比糟糠の妻のありけるに向ひて、「御身に言ひおく事、唯一つ侍り。御身は女の身なれば、直ちに御恩を受けたるにてはなけれども、わが御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歴々の妻とて大勢の所從に圍繞せらるゝは、限りなき御恩にあらずや。然ればわれ生害仰せ付けらるゝ跡にても、只朝夕今まで御恩のありがたかりし事を忘れざれ。假にも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて、我が身の物うきにつけて、上を怨み奉る樣なる事を言葉の末にも露おきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし」とぞいひける。

さて今か〳〵と待ちけるに、夜ふくる程に人來て門を叩き、「召あるまゝ登城すべし」となり。扨こそと思ひて登城しけるに、直ちに寢所へ召入れ、「其の方が書言ひし事心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれども呼

びつるなり。我があやまりたる事はとかく言ふに及ばず、其の方が志を深く感じ思うて滿足するぞ。」との事にて、直ちに腰の物を賜ひしかば、壹岐は思ひも寄らぬ事とて、覺えず落涙に咽びつゝ、賜を拜して罷り出でけりとぞ。（駿臺雜話）

六　かりがね

島崎藤村

さもあらばあれ鶯の　たくみの奥は盡さねど
又は深山の駒鳥の　調べの程はうたはねど
まづ飾りなき一聲に　涙を誘ふ秋のかり

長き嘆はもらすとも　なほ餘りある悲を
移すよしなき汝が身か　などかく秋を呼ぶ聲の
荒き響をもたらして　人の心を亂すらむ」
あゝ秋の日の淋しさは　小鹿の知れる限りかは
すゞしき風に驚きて　羽袖もいとゞ冷やかに
百千の鳥の群を出で　浮べる雲に慣るゝかな」
菊より落つる花片は　汝が啄むにまかせたり
時雨に染むる紅葉ばは　汝が翳すにまかせたり
聲を放ちて叫ぶとも　誰かいましを止むべき」
星はあしたに冷やかに　露はゆふべにいと白し

風に隨ふ桐の葉の　枝に別れて散るごとく
御空の海にうらぶれて　立ちかへり鳴け秋の雁金」

（藤村詩集）

七　佐渡が島

尾崎紅葉

九時三十五分に*此處を發車して、忽ち眼明かなりと驚けば、渺々たる日本海は、折しも波に一船を着けず、雲に一鳥を帶びずして、千萬頃の虛しく闊きに、唯、池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見るに、瑠璃の煙る樣に、物ありて幽かに顯るゝのを、早くも

此處　越後春日新田停車場。

「佐渡、佐渡」と案内する聲がした。信に*香嶽樓の緣端に伸びあがつて、「*わが眉太し」とこの美人を天の一方に望んだ佐渡が島は、今、目を遮る物もあらぬ三十海里の波上に、「*溫泉水滑洗凝脂」とやうに浮び出でたのである。美なる哉この島の風情。凡そ眺めて恁も懷かしく、又況へん方無く心動かさるる遠景色は、これを他に求めて、己は有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふに、

佐渡へ佐渡へと草木も靡く
佐渡は居よいか住みよいか

香嶽樓　越後赤倉溫泉にあり。

わが眉太し云々　紅葉の句、「涼風のわが眉太し佐渡が島。」

溫泉水滑云云　唐の白樂天の長恨歌の句、「春寒賜レ浴華清池、溫泉水滑洗二凝脂一。」

とあるのを見ても、この景に對して心を動かさざる者は無いと知れる。殊に「居よいか住みよいか。」と疑つた處に言はれぬ妙が有るので、この唄の精神も唯その九字に存すれば、又この景に人の恍惚たるのも頗るその九字の感に堪へぬのである。又彼の「*來いとゆたとて行かれよか。」の如きは、

尾崎紅葉

來いとゆたとて云々

來いとゆたとて行かれよか　佐渡へ、佐渡は四十九里波の上。

苟も日本語を解する者にして知らざるは無きまでに轟いて居る。其處が古の配處であつたとも知らず、今も小判に成る物が出ると知らぬ輩でも、波の上の行かれぬ處と云ふ事は皆心得て居る。それほどの口吟を思はずに、誰一人ここが過ぎらるゝであらう。遙かに佐渡が見える「四十九里」と直に胷に浮ぶ。それにしては近いやうだといふ疑が又起るのである。能登の輪島から四十九里と云ふ說が有つて、とにかく越後の唄ではないに極つて居る。佐渡の相川の人の談に、極々快晴の日、所謂日本晴には能登の

富小路侍從　名は敬直。
岸田吟香　美作の人。

珠洲崎が雲煙縹渺として、見えると謂へば見える位に見える。その人は「一年の中に唯一度見た」と云ふ。因つて、「來いとゆたとて行かれよか」の首を搔いて遠人を憶ふ惆悵無限の意が殊に深い。之に就いて思ひ出したのは、過ぐる年富小路侍從の行くを送つた、岸田吟香翁の歌である。なかなか面白い。

大君のみことかしこみ來いとゆたとて
行かれよかといふ佐渡へ行く君

己も亦一句無かる可けんやと、

來いといふ人あれ島は涼しげなり

鉢崎　越後中頸城郡に在り。
柏崎　越後刈羽郡に在り。
米山峠　越後頸城・刈羽の郡界に在り。
薩埵峠　駿河國庵原郡に在り。

抑、この海の雄渾と併せてこの島の秀麗を見るのは、北越鐵道線雙快の一で、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵るまで、米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつつ、八門のトンネルを出入するのである。その趣は稍、東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在つては全くこの氣魄を闕く。

道は荒波の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆ると云ふ有樣。その大なる者に在つ

ては、百歩にして崖と壅がり、二百歩にして巖鼻と突出るのを、總べてトンネルに貫いて、佛*に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者有れば必ず突いて進むのである。

佛に逢へば云云　佛祖機緣四十八則中の句、「逢レ佛殺レ佛、逢レ祖殺レ祖、於二生死岸所一、得二大自在一。」

トンネル續の線路は碓冰であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬはないが、別してこゝにその想が有るのは、長汀逶迤として、六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直ちに乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙が去れば丁と、彼等の爭つて五月蠅なすのが一々目に

入る。譬へばおのれ大剛の者にして、羣る敵を物の數ともせず、當るを幸ひ、一太刀づつ片端から撫斬にして通るも恁やと覺ゆる樣で、而も處は弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪韆韜と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠聳えたり、と思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。ここを過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つての興となつて、なか〳〵神經などを衰弱させて居る段ではなかつた。（煙霞療養）

高崎　上州群馬郡に在り。
劍閣　支那の四川省の境に在り。
妙義　上州三名山の一。
蜀道　支那の四川省にあり。
輕井澤　信州佐久郡東長倉村にあり。
追分驛　信州佐久郡にあり。木曾街道と善光寺街道の分岐點たり。
Goldsmith
上田城　信州小縣郡上田字前山に在り。
坂城驛　信州埴科郡に

八　越後より東京に

竹越三叉

肅啓、一昨日拂曉高崎を出發致候。劍閣の如き妙義、蜀道の如き碓冰、其の山光・水色は幾回も相識に候へども、林樹が數十百日の間冰風・雪雨に圍まれたる後、青帝の救に遭うて、荒涼たる風景の中より稍萌芽を生じたる風景は、天地生成の大勢力を示して、また自ら一種の美觀に御座候。

輕井澤を過ぐる頃、拙者十七年前曾て步行して此の地を過ぎしを追憶し、舊時の追分驛の如何になり行きしかを傍人に問ひ候處、今は荒涼たる一村落と相成候由。聞く所によれば、追分の油屋なるもの、旅籠屋にして、其の盛時に方りては二百五十人の雇人を使役致し候へども、幕府の制、一私人にして百人以上を役するを禁じたるが故に、九十九人と屆け居候由。以て追分が以前は相當なる一市街なりしことを想像被致候。而して今や鐵道のため桑田碧海の諺を眼前に示し、實にゴールドスミスの「荒村行」も思ひいだされ候。かゝる懷舊談をなしつゝある間に、上田城を右方に見て打過ぎ、坂城驛の後に一丘陵を見受

け候。是は村上義清の城址なりとの事に候。拙者の祖先は村上の一族清野より出で、義清と共に信玄に攻められて身を容るゝの地なく、謙信に投じたるものゝよし傳へられ居候へば、此處もまた我が故郷の如くに思はれ候。

郷里に入り候へば、雙親は例に變らず壯健にて、父は鷄巣に入りて卵子を取出し、母は臺所に出でゝ晩餐の用意を催され、家兄は爐にあたりて姪兒の頭を撫しつゝ其の學業を語る等、政事なく功名なく、眞率なる家庭團欒の畫圖を現出致候。唯家は元市街の中にありしに、火災に罹りし後、市街を離るゝ三四町程の松林の間に建てられて、形容全く舊時に異なり候。此の松林は拙者の幼時、頑童を將ゐて雉子・兎を追ひたる地にして、其の颯々たる松風の音、切に當年を回憶せしめ候。

人は老い物は換れる故郷に
むかしながらの松風の音

歩を移して海濱に出づれば、處々尚殘雪あり。里の少女等殘る雪を搔分けて防風を採るを見受候。防風は三葉芹に似たる短草にして、其の根は深く砂中

あり。上田屋代間の鐵道の一驛なり。
村上義清　信濃の人。戰國時代の名將。
城址　坂木城址なり。
郷里　越後國中頸城郡柿崎。

にあり。白莖凡そ五六寸なるを砂中より取出して食ふ。其の味淡泊にして一種の香味あり。此の草を採るは、亦拙者幼時の快樂の一なりし事に候へば、事々物々頑童時代を憶起いたし候。

少女等が殘んの雪をかきわけて
防風とる手に春風の吹く

九　信長論

中村孝也

本能寺の變は忽然として織田氏の覇業を中斷したるものなり。天下の形勢はこれより急轉直下、新に

本能寺の變　正親天皇天正十年。（三四二）

安土時代　天正二年―十年。（三三四―三四二）

別個の英雄を躍出せしめたりき。故に余はこの事變を以て、安土時代の終焉と認むることを適當なりと思惟す。この時に方り、靜かに信長の人物を思へば、尊敬の情と、遺憾の念と、交胸裡に徂徠するものあるを覺ゆ。請ふ少しく之を論ぜしめよ。

信長は大才なり。然れども其の大才たるや、亂世の英雄たるべくして、治世の名將たるべきものにあらざるなり。顧ふに、信長は肥滿せる身體、孱弱なる筋骨、恐らくは一見して烱々たる眼光、人を慴伏せしむる趣あらざりしなるべしといへども、勇猛・强忍・英邁・

果斷、豪膽にして機才縱横なるところ、彼の性格の奮鬪的なること、以て想見すべし。彼は少年のとき、磊落・粗豪なりき。頭に茶髪髷を戴き、鮮かなる紅絲を以て之を結び、朱鞘の大刀を帶び、路上に果物を食ふ。三間柄の長槍を提げて馬を飛ばせ、游泳を以て一年の半ばを送る。父信秀の葬儀に當り、香を掴んで爐中に擲ちたる傍若無人の振舞、つひ

織田信長

に平手政秀をして憂憤諫死せしむるに至れり。かくの如き奮鬪的性格は、まさに時代思潮の權化といふべきものなり。時代に精神あり、具體化して一個の人格を生ず。この人格は必ず時代の成功者となる。彼が成功し得たる所以のもの、濃尾の平原が京師に近きこと、平原の物質が豐富なること、大なる勢力が洛の途上に存せざりしこと、京師の上下に歡迎せられしこと、東面の德川氏と聯合せること、遠交近攻の政策と、四周の敵に對する內線作戰が適當なる境遇の下に行はれたること等を數ふべしといへ

ども、究竟するところ、彼の性格が時代の要求と合したるところに存す。　成功の根本原因はこれなり。

然れども失敗の原因も亦こゝに存せり。　凡そ社會は一個の活物にして、その精神その思潮は、歳月と共に變化するものなり。　個人の性格をして之に伴なひて變化しゆかしめば則ち可、苟も變化することなくんば、早晩世と相背離して、失墜することなきを保せず。

信長は亂世の英雄たるにふさはしき多くの奮鬪的素質を有したりき。　故に一族・骨肉を戮して尾張を

定め、舅家を欺いて美濃を定め、妹婿を窘しめて近江を定め、將軍を逐ひて京畿を定むる如き、權力主義を發揮することにおいて大いに得たりといへども、「卿雲爛たり、禮縵々たり、日月光華あり、旦復旦兮」雍々たる王者の風を有する事なかりき。　彼には颯爽たる項羽の雄姿ありき。　然れども寛々たる劉邦の高風を缺きたり。　かるが故に彼の性格は、近畿における惡戰・苦鬪には適當なりきといへども、居然として天下に號令せんと欲せば、更に修養を積むべき必要ありき。　然るに不幸にして光秀に對する峻酷は、彼の

修養のこゝに及ばざりしことを顯示す。時代は開展し來りぬ。しかも彼の性格が、之に應じて發展し來らざりしとすれば、彼は終にとこしなへに時代の寵兒たる能はざるものなり。勢ひ此の如くんば、假令一光秀なしとするも、彼の將來は未だ必ずしも洋洋たりといふべからず。蓋し天の作せる孽は猶違るべしといへども、自ら作せる孽は活くべからざるが故なり。

かるが故に、余は信長の偉大を讃することあへて人後に下らずといへども、その死するや、當に死すべき時を以て死したることを思ふ。凡そ絶大なる事業は、一個の特異なる人格を以て完成せらるべきものにあらず。信長は、奮鬪的性格を以て撥亂反正の方面を擔當せるものなり。その業略〻緒に就く。之を繼承して大成せしむるには、更に他の雄大豪爽なる人格を必要とす。羽柴秀吉は卽ちこの種の人にして、天下統一の大業は、卽ち彼の手によりて成就せられぬ。信長死せりと雖も、天下の事亦憂ふべきなし。これ余が信長の死を目して、適當なる最期と稱する所以なり。何ぞ深く流涕するを須ひん。

天のなせる云々　孟子離婁上篇に「天作孽猶可レ違。自作孽不レ可レ活。」

然りといへども彼先づ出でざりせば、秀吉・家康の續いて現るゝこと容易に期すべからず。一身以て世變の樞機となる。彼もまた人傑なるかな。

一〇　豐臣秀吉

古人景仰すべきもの、甚だ多し。豐太閤の如き、その一人なり。事業の宏壯、施設の警拔、氣宇の快闊、度量の廣大、千古絕倫といふべし。公の事業・施設は、後世或は得て學ぶべし。その氣宇・度量に至りては、ほとんど望むべからず。公の人となりを想ふ毎に、襟懷

應仁　後土御門天皇、足利義政の時代。（一四六七―一四六八）

の爽然たるを覺ゆ。

わが邦に未曾有なる、*應仁以來百年の大亂を定め、武威は異域をも震動せしめ、天下慴服して、復一人の頭首を擡げ得るものなき尊貴の地位にある人として、左の一事あるを想ふ時は、まのあたりその人を見るが如し。

豐臣秀吉

「或時、太閤馬に騎りて、烏丸通りを參內す。新在家

の下女四五人、赤前垂を掛けたるが、立出でゝ見物す。太閤馬上より見て、『只今われ内裏にて能をすべし。皆々見物にこよ。』

また事を爲すに臨んで、機警・迅速、一點も容態ぶらざるは、左の一事にても知るべし。

「太閤茶の湯を催し居たまふ處へ、*佐久間が*中川を討ちし注進きたる。太閤その座より、裳をまくり、えいやゝとて、馳せいで給ふ。御馬廻り衆はおひゝに追ひつき奉る。」

しかも盛装の行列には、唐冠を冠り、作り鬚をつくる

佐久間　名は盛政、尾張の人。

中川　名は瀬兵衛清秀。攝津の人。

など、殊更に容態ぶることあるは、前に比較してまた面白し。蓋し唐冠を冠るは、信長の眞似なり。その他、公の驕奢は、多く信長を手本とせり。*聚樂・*伏見の宏壯は、安土の結構をまねたるに始る。されど公は必ずしも儉德の心なきにあらざりしは、左の物語にても明かなり。

「太閤、*高野山へ參詣のとき、『割り粥を進めよ。』とのたまふ。暫くあつて、料理人調へ參らす。太閤喜びていふ。『高野山は、白無き處なり。わが割り粥を食はむことを知りて持ちきたる料理人、才覺の至り

聚樂　京都、今の上京區に築きたる邸宅。

伏見　山城紀伊郡伏見に築きたる城。

高野山　紀州伊都郡にある山。金剛峯寺のある所。

なり。』といふ。實は、持ちきたらず、俄かに多人數にて、俎の上にてきざみ、割り粥となせるなり。後に話のついでに申しければ、大いに怒つて、『無くば、無しといひて、常の粥を出さむに、何の仔細かあらむ。わが力には、一粒づつつけづりて食ふも、心のまゝなれども、さやうの奢りをばせぬものなり。』とて怒られき。」

蓋し公の失は、自分の才略を恃み、古今の治亂を究めずして、戒慎の足らざるにあり。公は百年の大亂を定め、人民塗炭の苦を救はんが爲に、この世に出現せし偉物として見るべきのみ。（古人評論に據る）

一一　武士道

藤岡作太郎

日本の武士道は、或點に於て自我の觀念を沒却するが故に、一部の人士をして批難せしむるも、まづ大體について云へば、日本固有の美點を發揮し、國民精神の特長を示現せるものとして、世界に對して誇るべきものとなさざるべからず。

上古の世、我が國民の間に發達せしは、尙武の氣風なりき、物部・大伴の二氏は、弓矢を執りて皇室を護衞

物部・大伴の二氏　物部氏は可美眞手命に出で、大伴氏は道臣命に出づ。

するを世職とし、子孫に武事を傳へ習はしめ、心膽を練り、氣節を磨かしめて、かりそめにも家名を墜すことなからしめんと教へたり。文明の空氣は次第に其の習性を菲薄ならしめ、平安朝の末期、京師に於ては、武人さへも剛毅の風を失ひたりき。

武家執政の世となりては、將軍・執權を始め大名・小名、その一族子弟を勵ますに、皆此の意を以てしければ、武人の特性愈〻發達して、こゝに所謂武士道が其の體を具へたるを見る。特に禪宗等の佛教が、新に興隆するに至りて、武人も多く其の道に入り、人生を電光

石火と觀じて、濁世に何の名殘か惜しからんと思へり。形體は朽つとも恥辱は消ゆる時なし、されば身命こゝに滅ぶとも、弓矢取の本意は死を善道に守り、名を義路に失はじとこそ勵むべけれ。これ彼等が信念なりき。

武士道は、鎌倉時代の陶冶を經、戰國時代に至りては益〻發達し、德川氏の世に至りて完成せられぬ。その要素とする所凡そ三あり。一に武勇を尙び、兵馬の術を鍛錬する事、二に君に忠にして、一言を千鈞より重んじ、百年の生命を塵埃より輕んずる事、三に清廉

を旨として、財利を輕んずる事、これなり。殊に武士は、利欲に迷うて意志を枉ぐるを卑怯の極とし、前に千金を積むとも、これが爲に初一念を飜さざらんと期す。されば已むを得ざることありて金銀を借るとも、無形の名譽を質として、敢て有形の物品を典せず。天正中には、武士の借用證文に、「若しこの金子相濟み申さず候はば、我等人にてこれあるまじく云々」とあり。この氣風は自ら町家に移りて、商人の借用證文にさへ、此の種の言葉を見るに至れり。

（日本風俗史による）

天正中　天正元年は二二三三年、十九年まで續く。信長及び秀吉の活動時代。

一二　丈夫の吟

金崎賢

荒海のそこひ深山の奥　よき金よき石埋れ沈む
海には風あり波逆まき　山には獸吼えのゝしる
風をば怖れて海に背き　獸に愕き山に入らず
寶を獲んとて身をあせるも　寶に足なし自ら來ず
熊捕るさつをは穴にも入り　珠拾ふあまは浪をかづく
怖れては成らず大なる名　ためらひて遂ぐる事ある無し
苦にあひて腕こまぬき　息つき歎くはをのこならず
我が心鍛ひ腕を磨く　試しの石ぞと勵み立てよ

悲しみある時胸塞がり　頭を垂るゝは人の恥ぞ
嚴に立つ矢も心からと　戰ふ力をふるひ起せ
さはりは世の常氣を挫かず　妨起るは成るしるしと
空うつ浪にもつき入るべし　爪とぐ虎にも笑みて向へ
青海のま中岩が根組み　み國造りし大和男の子
海よりは強き力を受け　山よりは高き心を得たり
夕日の岩角負ひ立つ獅子　朝風に翼ひろぐる鷲
その強き姿高きこゝろ　ますらを我の鑑とせん

Olympia ペロポンネサスのアルフェウス河畔。

一三　オリンピアの回顧

黑板勝美

オリンピアのゼウス神は希臘全土の信仰を得た神である。四年に一度の祭日には、南は亞弗利加のシラキュース、東は小亞細亞のリーン、西は伊太利のあたりまで、苟も希臘人の住んだ處からは、幾千幾萬の人々が集ひ來たのである。オリンピアの廢墟の奥に、一部分のみ發掘された演技場の址は、彼等が一世の晴の場所であつた。今はその入口に蔦かづら高く繁り合つて、羅馬時代に建てた凱旋門の半ば壞れたるに纏はつてゐるのが、如何にも名譽の月桂冠

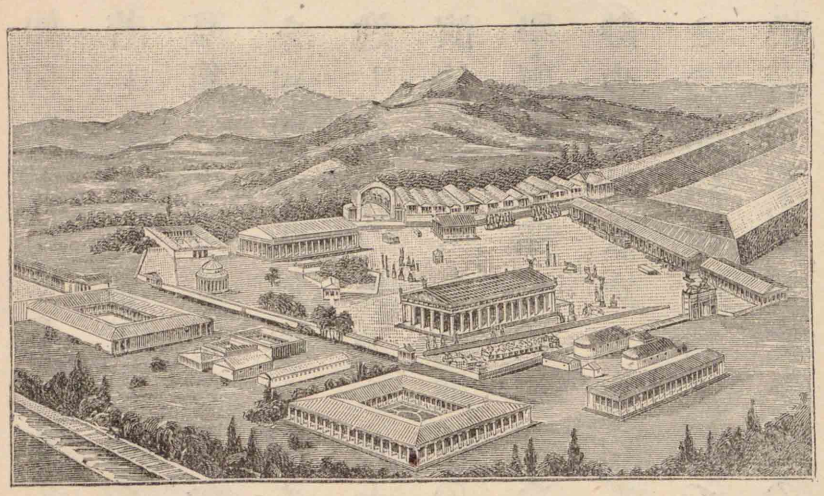
Syracuse Cyrene Zeus

であるかのやうである。

この大演技は四年ごとの大祭日に催された。此の日は神聖なる平和の日として、希臘全土の人々が敵身方を忘れてこれに列したのである。希臘全土の一致結合は、このオリンピアの演技によつて出來たといふも過言ではない。國民全體が面白く愉快にこゝに集り、各州の選士が雲を呼び風をおこして、龍虎相搏つたのは、如何に壯快にかつ目覺しかつた事であらう。

集つて來た人々の中には、詩人もあつたであらう、學

Herodotus
Demosthenes
Themistocles



オリンピヤ演技場

者もあつたであらう。

*ヘロドトスの如き歴史家も、*デモステネスの如き雄辯家も、*テミストクレスの如き勇將も、さては政事家、法律家、富めるも、貧しきも、名門も、平民も、あらゆる階級、あらゆる職業の人々が互に顏をあはせ、談笑周旋、この間を徘徊した樣の、

如何に面白く且賑かであつたらうか。

若しこゝに名工があつたとせよ。彼の靈腕はこの羣集によつて得る所がなかつたであらうか。人生を研究する好機、人間を捕ふる機會は、彼等の決して逸しなかつた所であらう。想ふにこの演技は、單に演技そのものゝ進歩のみを來したのではない。哲學・歴史・戯曲・音樂・彫刻などの發達に影響したことも尠少ではなかつたのである。

この祭には市場が立つ事になつて居た。物資の交換・賣買が、如何に全國の商業・農業を益したことであらう。かくて思想・知識の交換、延いては感情の融和が、國民の一致に暗々裏に貢獻する所があつたと同時に、商工業等にも影響したものが多かつたのである。彼等はペルシヤ戰爭に於て、國民的敵愾心の絶頂に達した。此の時小忿を忘れて大敵に當り、よく東方の強を挫くことが出來たのは、このオリンピアの演技に負ふ所が少くなかつたと思ふ。

ペルシヤ戰爭　第一次西暦紀元前四九二年　第二次紀元前四九〇年。　第三次紀元前四八一年。　第四次紀元前四七九年。

しかもその演技者は決して職業的の者でなかつた。ただ各州から出た青年選士であつた。そして羅馬時代に入つて職業的となつた時は、この演技のはや

衰へ始めた日であつた。この演技の精神は、全國民をして眞の勇者たらしむるにあつて、全國民の體格・意志の發達は、この演技によつて益〻助成せられた。古代希臘に於ける教育の格言は一言にて盡く、曰く「健全なる肉體には健全なる精神宿る。」これである。ただこの健全なる精神を養成せんため、健全なる肉體を作るに苦心したのである。希臘の彫刻にはこの意味が現れて居る。希臘の文學にもこの意味が見えて居る。

オリンピアの祭典は、かくて希臘の歴史はじまつて

以來、永く國民的祭典として羅馬時代まで連續した。その事蹟は希臘の文化と共に、永久に亡びることがないであらう。我が國には、このオリンピア演技のやうなものは無用のことであらうか。我が固有の武術にせよ、各學校のベースボールにせよ、フットボールにせよ、素人相撲にせよ、各階級を通じ、各地方を通じ、擧つてその選士を出して龍攘虎擊の壯快なる競技を演ぜしめ、之を觀る者もまた全國到る所から雲集する事の出來る一の演技場の無いのは、盛世の一大遺憾ではなからうか。余偶〻オリンピアに遊び、

Louvre
Louis XIV

雷雨を衝いてゼウス神殿の廢墟に詣で、雜草萋々たる演技場を徘徊して、古希臘の文化が淵源する所こに在りと想到したとき、余の心耳に囁く天來の聲があつた。それは「我が國民の崇敬し、信仰する伊勢神宮に一大演技場を建て、その大祭日に全國民の競技を演ぜしめよ。」といふのであつた。（西遊二年歐米文明記）

一四　ルーヴル美術館

櫻井鷗村

*ルーヴル美術館は*ルイ十四世の六宮殿の一で、王は此の宮に歐洲の美術を蒐集して、天下に誇つてゐたのであるが、革命時代になつて、之を改めて美術館となし、佛國中の宮殿・寺院の寶物を引つ攫つて來て此處に集めた。其の後へ*ナポレオンが出て歐洲を蹂躙した序に、伊太利・獨逸・和蘭などから、どし〳〵美術品を奪つて來て、戰利品と稱して此のルーヴルに飾り付け、おまけに「ナポレオン美術館」とまで命名した。其の時のルーヴルは巴里の美術館ではなくして、實に世界の美術庫たる觀があつた。ナポレオン流竄後、かの戰利品は多く其の本國へ還つたが、猶ルーヴルに殘されたるものも尠からず、加ふるに美術國の

Napoleon

佛蘭西は、此の美術館の富を增殖するに勉めてゐるし、十九世紀の閒に大家・名匠も多く輩出して、其の作品を此處に留めてゐるので、ルーヴルは今以て歐洲否世界に冠たる美術館と稱して差支ない。ルーヴルを見ずしては未だ歐洲の美術を語ることは出來ない事になつてゐる。

ラフアエル筆

余は只僅かの時閒を以て、其の繪畫部と古代彫刻部とを見ただけであつたが、館內をすたく早足で歩く中にも、所謂「走りながらにも讀むべき」著大な名畫・彫刻が左右に配る眼の中に映じ來つたのである。

ロリム筆

畫聖ラフアエルの大作が何枚もあるのには驚いた。「顏被を取る聖母」など神々しいものや、「天使ミカエルの惡魔退治」の壯烈なものなどを見た。レオナルド、ダ、ヴイン

Michael　Raphael
Leonardo da Vinci

チの稀な宗教畫もあれば、ムリロの「聖母昇天」もある。英國畫は乏しいが、レイノルヅの小兒畫は傑作と稱すべき價値を有してゐる。グルーズの少女畫も數々あるが、中にも乳賣の少女は、豫てより憧憬してゐた原物に接したのであるから嬉しかつた。ミレーの「落穗拾ひ」は大幅ならずと雖も、一管の筆能く農民疾苦の狀を現してゐる。

グルーズ筆

Millais　Grouse　Murillo　Reynolds

ルーベンズの大作十八枚を藏めたルーベンズ室が、壯麗な建築を以てこの色彩燦然たる刷毛の跡を珍藏してゐるのは、美術崇拜の意を盡したものと見た。全館の藏畫三千枚、それが一々見て居られたものでもなければ、覺えてゐられるものでもない。古代彫刻部は何れも希臘・羅馬の名作・遺品を蒐集したものであるが、素通りの見物だから、どれがよかつたか少しも

ミレー筆

Rubens'

Milo
Venus
Florence
Medici

記憶に存して居ないが、唯一つ暫く足を停めて眺め入り、そして長く忘れられないのはミロのヴィナスであつた。希臘のミロ島から發掘したと云ふ兩腕のないヴィナスの石像、其の氣品の高いこと、希臘でも屹度名作であつたのに相違ない。此の後余はフロレンスでメディチのヴィナスも見たし、羅馬の政廳のヴィナスも見たし、其の他多くのヴィナスの石像を見たけれども、何れもこのミロのヴィナスの莊嚴端麗にして、眞に神性の美を現し、女性美の理想を發揮したものに及ばざること遠しであると感じた。

Brooklyn

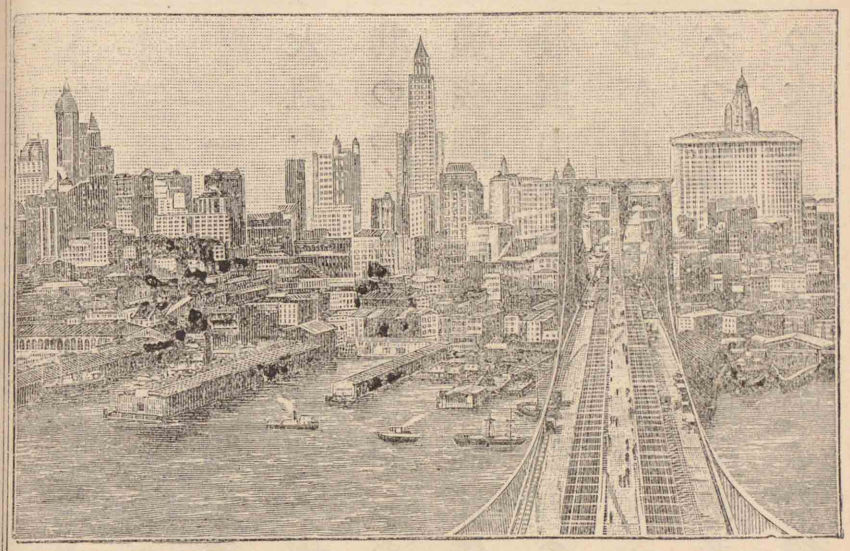
（歐洲見物）

一五　紐育の四大橋

原田棟一郎

大紐育の發展力は到る處に鬱勃して、一事一物盡く其の發展の道程を語らぬ者はないが、特に東河の交通機關ブルクリン橋に依つて、大紐育の澎湃たる大發展力、突破的大活動力の、いかに偉大なるかを知る事が出來る。紐育がブルクリンを合せて大紐育となつた前後から此の兩者の交通は益激しく、さしもの大橋ではあるが、この橋と二三の渡船場だけでは

Williams　Grand



ブルクリン橋

追着か無くなつた。

そこで千九百三年には經費二千三百萬弗を以て、此の上流のグランド町から渡る延長七千二百呎のウイリヤムス橋を拵へた。建築設備はブルクリン橋と大同小異であるが、大荷物の運搬を主とし、耐重力に於

Manhattan　Queens

て世界第一の稱がある。然るに之でも尚不便と云ふので、今度は經費千八百萬弗を以て、其の上流の五十九丁目から通ずる、延長八千二百二十一呎のクインス區橋を架設し、今から三年前に出來上つた。之が所謂紐育の三大橋と稱せられたもので、當時既に例の地下電車が河の底をくゞつて、日に何十萬の人を運んで居たのに、それで尚足らず、更に今度は此のブルクリン橋のすぐ上流に、二千七百萬弗の大費用を以て、マンハッタン橋と云ふ延長六千八百五十五呎の新大橋を架設した。之はつい昨年出來上つた

ばかりで、以上の連絡機關を以て漸く張切れんとする大活動力、大膨脹力を防ぎつゝあるのである。

其の後出來た橋は元より其の規模其の設備に於て、ブルクリン橋に優るは勿論であるが、而も此等の三大橋及び河底電車が、皆此の十年以内に出來たと云ふ事は、更に紐育の發展力のいかに絶大なるかを知るに足る。　二千萬弗と口で云ふには何でもないがいつも問題になる大阪築港の全經費と伯仲の間にある譯で、云はゞ紐育市は此の十年間に、大阪築港以上の大工事を三つ成就した事になる、其の富力の大、

Hudson　Pennsylvania
Jersey City

今更驚くの外はない。　此の外ペンシルヴァニヤ鐵道の線がも一つ此の河底をくゞり、更に反對の側のハドソン河には二つの河底線がジャーシー市に通じ、其の上織るが如く渡しの汽船が通つて居るが、それでも此處に今一つ橋を架ける必要があると云ふので、近來弗々議論がある。　いづれ近年の内には出來る事であらうし、或はジャーシー市をも合併し、大大紐育市とでも稱して愈、世界第一の大都會となるのも近き將來にあらう。

斯く新しい大なる橋が出來て來ては、流石のブルク

John Roebling　Whitman

リン橋も最早第二流以下に落ちるわけであるけれども、それでも今なほ紐育の橋と云へば、直ちにブルクリン橋が代表者となるまでに有名で、誰でも世界名橋の隨一に數へるわけは外でもない、それは詩人ホイツトマン*が嘗て此の橋桁にぶら下つて、職工をして居たと云ふばかりでなく、父は長柄の人柱と云ふけれども、之はまた父のみならず其の子までが人柱となつて、眞面目なる大努力を續けた精神が永久に此の橋を支へて居るからである。此の橋は吊橋架設の名人ジョン*、レーブリングと云ふ技師によつ

William Roebling

て設計せられ、レーブリングは實に其の一代の大事業として、命を懸けて此の工事に着手したのであつたが、夜を日についでの心勞の結果、工事半ばであへなく斃れ、人柱ならぬ人柱たるに至つた。そこで其の息子のウイリヤム*、レーブリングは此の父の精神的人柱に發憤して、父の事業を引繼ぎ、第二の人柱たるべく決心し、父に讓らぬ熱誠を以て從事したが、これまた不圖した工事用ダイナマイトの破裂によつて、憐むべき癈疾者となつて了つた。而も彼の熱誠は死すとも變るものではなかつた。直ちに病牀を

橋畔に構へて、呻吟しつゝなほ仕事を怠らず、何年間と云ふもの、日々病牀の窓から望遠鏡を以て工事を監視し、一々其の妻を身代りに走らしては工事を指揮し、漸く其の工を竣へたのである。實に前後十三年、父子二世が共に此の橋の爲に身を犧牲に供したのである。千載の下自ら懦夫をして起たしむるの痛烈事ではないか。即ち其の名橋の名橋たる所以であるが、此の大努力・大根氣は、啻に此の橋を支ふる精神的人柱たるのみならず、今日、米國の偉大を稱ふる所以のものも、亦實に此の精神的人柱の支ふる處

蒲生君平　下野の人、寛政三奇士の一人。

小澤蘆庵　尾張の人、國學者。

に由るものと云つても誣言ではあるまい。（紐育）

一六　蒲生君平と小澤蘆庵

瀧澤馬琴

蒲生君平、山陵探求の爲に京に赴きし時、かの地に絶えて知る人なかりければ、便らむ方もなくして困じ果てたり。時に小澤蘆庵は古學を好みて萬葉風の詠歌に名高く、世にすねたる隱逸なりと聞きしかば、その助を借らむとて、やがて蘆庵が宿所をおとなふに、そが僕出迎へて「いづこより」と問ふ。伴りて、「某は

下野なる宇都宮の蒲生伊三郎といふ者なり。琴を、好み候へども、田舍にはよき師なし。主人の翁は琴の妙手にておはする由きゝ傳へて、はる〴〵と尋ね來つるにて候。」といふ。僕は奥に赴きて、これを告げたるに、蘆庵は聲を高くして、「あな無益にも訪はるゝものかな。汝出でてしか答へよ。『主人は久しう客を辭し交を絶ちたれば、都のうちだにも親しうものせるは稀なり。琴は若かりし時搔鳴らしたりけるを、遠近の人に知られて、かれに聽かせよ、これに敎へよといはるゝがうるさければ、近頃うち擯きて薪に

蒲生君平

小澤蘆庵

代へたり。かゝれば所望に從ふべくもあらず。他に求め給へ。』といへ。」といふ。君平は僕が報ずるをも待たず、「翁の御答はこゝにもつばらに洩聞えたり。某なほ一言あり。願はくは枉げて聞き給へ。われは實は儒なり。しかゝの志願ありて都に上りつれ

ども、相識れる者絶えてなし。翁の古學を好み給ふと、その氣質の俗ならぬとはかねて傳へ聞きしものから、いひよる由のなきまゝに、琴を學ばむとて來つとはいひしなり。こは長者を欺くに似たれども、その虚言は已むことを得ざるより出でたるなり。今一度わ殿を勞せむ。このよし取次ぎ給へ。」といふ。

蘆庵もこれをもれ聞きて、「さりとは思ひがけざりき。そは珍しき客人なり。對面せずば悔しきこともあらむ。こなたへと申せ。」とて、やがて面を會はせけり。君平深く歡びて、事の趣つぶらに語り出づるに、蘆庵

ひたすら感歎して、「足下は得がたき學士なり。さる志ならむには、わが庵に杖を留めて、こゝらあたりの陵を靜かに探求し給へ。」とて、また他事もなくもてなしけり。

これより君平は日毎に陵を訪ねめぐるに、ともすれば日暮れて歸るを、主人はいつもみづから風呂を焚きて、入浴せさするを例とせり。君平その心づかひを心苦しとて辭みたれど、「これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下の如き國の爲に力を盡す人の疲勞を聊かなりともうち慰めむの心のみ。」

必ず辭み給ふな。」とて聞入れず。かゝりし程に、君平はある夜更闌けて子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだいねず、例の如く入浴せさせ、飯をすゝめ、さていふやう、「われ足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕は憩はせむとて、手づから風呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を訪ね巡れば、とて、今までは用なからむに、道草食うてか、老人に物を思はせ給ふこと心得がたし。」と呟く。君平聞きて容を改め、「翁のうらみ理なり。わが非をかざるにあらねども、こよひかく更たけたるはいさゝか故あり。懺悔のため笑に供へむ。今日は某の天皇の陵を訪ねたりしに、日暮るゝまでたづねもあはで、思はずも等持院なる尊氏の墓を見たり。こゝに至りて年頃のうらみ心頭に起りて堪へられず、墓に向つて罵るやう、『梟臣尊氏、靈あらば今いふことをたしかに聞け。汝が一旦治りたる建武重祚の世を亂して、逆に取り、逆に守り、毒を後世に流しゝより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もために燒失せ、王室もこれによりて衰へ、歷代帝王の山陵すらも跡なくなりて、我等にさへ飽くまで物を思はする

等持院　山城國葛野郡衣笠山の南麓に在り、臨濟宗なり。

建武重祚の世　建武は元年より四年まで續く。此の時後醍醐天皇再び政治の實權を收め給ふ。

は皆これ汝が罪なり。　天罰思ひ知るべし。』とて、杖をもて石塔を思ふが儘に打敲きぬ。　かくて寺門を出づる程に、物ほしうなりしかば、道の邊の酒屋に立寄り、怒に任せて飲みし程に、六七合を盡したりき。　さて酒屋をば出でしかど、醉ひて足も定まらず。　この儘にて歸らば必ず翁に叱られむ。　半ば醒して行かむと株に尻をかけしより、うまいやしけむ、驚き覺むればはや更闌けたり。』と語るに、蘆庵は呵々とうち笑ひ、『さても世には似たる馬鹿もあるものかな。　我も去にし年、或日靈山（リヤウセン）の邊に逍遙して、長嘯子（*）の墓所を

靈山　鷲尾に同じ。山城國洛東にあり。

長嘯子　木下氏、國學者。

伏見の籠城　後陽成天皇慶長五年。（一三〇〇）

鳥居元忠　三河の人、德川の忠臣。

過ぎし時、ゆきもえやらずにらまへて、『長嘯子不滅の罪あり。　わぬし自らこれを知るか。　わぬしは豐太閤の外族として、位高く采地も廣かるに、心ざま武士に似ず。　伏見の籠城に敵の旗色に鬼胎を懷きて、鳥（*）居元忠等を棄殺にし、かつ事平ぎて後罪を蒙り、纔かに命を助けられしを幸にして恥を知らず。　心にもあらぬ世捨人顏して、えせ歌多く詠じたる、一盲衆盲を引きしより、歌の調のわろくなりて、今に至るまで直らぬは、これ不滅の罪にあらずや。　冥罰かくの如くならむ。』と罵りながら杖を擧げて墓を毆ちたるこ

とありけり。こはよく似たるにあらずや」と語りもあへず、聞きも終へず、齊しく腹を抱へたり。（兎園小說）

一七　天明調

春

春の海日ねもすのたりくかな　燕村*

日暮れたり三井寺くだる春の人　曉台*

川船やひばり鳴き立つみぎひだり　蘭更*

夏

五月雨やある夜ひそかに松の月　蓼太*

燕村　谷口氏又與謝氏。天明俳壇の巨人。

曉台　久村氏、尾州の俳人。寛政四年死、六十餘。

蘭更　京都の俳人。醫を業とす。

涼しさや鐘をはなるゝ鐘の音　燕村

雨乞や火影に動く雲の峰　蘭更

秋

有明や淺間の霧が膳を這ふ　一茶*

曉の寢姿さむし九月蚊帳　曉台

江渺々釣の絲吹く秋の風　燕村

冬

化物の正體見たり枯尾花　也有*

冬枯や木葉しづまる川の底　移竹

ともし火を見れば風あり夜の雪　蓼太

蓼太　大島氏、雪中庵第三世の俳人。

一茶　信濃の俳人、俳諧寺と號す。

也有　横井氏、尾張の人。俳文の大家。

五色濱　淡路にあり。佛崎と雁來岬との間の濱をいふ。

鳴門岬　淡路島西端の岬角。

福良の港　淡路島の西にある港。

一八　大鳴門のながめ　その一

久保　天隨

明くれば八月二日なり。今日は名だたる鳴門の見らるゝ嬉しさに、とく起きいでて、急ぎ宿を立出でぬ。昨日五色濱にて年老いたる海士に逢ひ、今日の退潮は、午の頃に始るよし聞きたれば、早きが上にも早く鳴門岬に至らばやとて、朝風の涼しきほどに歩を早めつゝ、二里許りにして、福良の港につきぬ。この日の中に鳴門の壯觀を見つくし得なば、直ちに阿波の

撫養の浦　河波國の東部にある港。

撫養の浦へ渡りなんとて、先づ舟をやとふ。舟は長さ五六間もあらんかと思はるゝばかりの大きなる艀にて、板をならべて篷にかへたり。六十に近き舟人と、その子にやあらん二十ばかりの若者と、共に櫓を推すなりけり。福良の港は入海ひろくして、三面に山を回らし、浦口には近く煙島と呼ぶ青螺の横たはれるなど見えて、景色えもいはず。漲碧油を流せる如くにて、うつれる雲の影亂れたり。程なくこの港を漕ぎいでぬ。右手には幾千年の波濤に洗はれたりけんと覺しき懸崖のかどくしき

が、西の方へ長く延きたり。時しも十時過なれば、赤日頭上に輝きて、暑さは息の根の絶えんばかりなり。たまくそよ吹く潮風に一時は蘇りたらん心地もすれど、見るさまのあまり單調なるに、名には負へど鳴門の濤もいかならんなど、友と打語らふひまに、舟ははや長き懸崖をぞ離れゐたる。舟子はこゝぞ名だかき鳴門岬よといひすてて、なほ西へ進むこと三反許り、やがて舟を止めしが、碇を下さず、波のまにまに漂ふにまかせぬ。舷頭に立ちて打眺むるに、舟子はうづくまりて煙草くゆらしなどして、わが指し問

阿那賀の浦　淡路の西端の浦。

大毛山　大毛島とも扇山ともいふ。大鳴門小鳴門の間南方なる亂形の島。

皇太子殿下　今上天皇陛下

ふ所々の名をいひもて聞かせぬ。鳴門岬は巖嘴長く突出し、北は戸崎・鎧巖など呼ぶ巉崖となりて、遠く阿那賀の浦までもつづけり。この岬の尖端を行者が鼻といふ。斷壁の高さ數十仞、下には危巖摺疊して、怪獸の奮躍するが如し。對岸は阿波の大毛山にして、その半腹なる平地は皇太子殿下行啓の際、觀潮亭を構へられし所とて、今もかたばかりなるが殘れり。山脚海に入りて孫岬となり、鳴門岬と相去ること僅かに十餘町。こゝぞ世にいふ鳴門の瀨戸なる。

大鳴門　大毛島の孫崎と淡路島の鳴門崎（行者嶽の岬角）との間にあり。
小鳴門　一名撫養の瀬戸。島田島・高島・大毛島を東側とし、陸岸を西側とし、北泊を北口とし、撫養を南口とす。
北泊　阿波國に在り。今は瀬戸村といふ。
小豆島　瀬戸内海に横たはれる島。

一九　大鳴門のながめ　その二

そも鳴門といふに二箇所あり。こゝなるは大鳴門にして、小鳴門と呼ぶは、なほ北に數里をへだてゝ北泊のあたりなりといふ。さてこゝの海峽には、中ほどと覺しき所に、廣さ數百歩なる平巖あり、中の瀬と名づく。これと竝びて巨礁數を知らず。かく瀬の巖のつづける處は水底さまでならねど、その左右は俄かに深くなりゆき、奈落の底に通ふかと疑はれて、百仞にも餘れりとぞ。折しも銀潮みちたゝふれば、巖どもは沈みて見えわかず。遙かに讃岐の山々、小

讃岐國に屬す。
椿の泊　阿波國那賀郡椿村にあり。
日の御崎　又日井崎といふ。日高郡にあり。今燈臺を設置す。

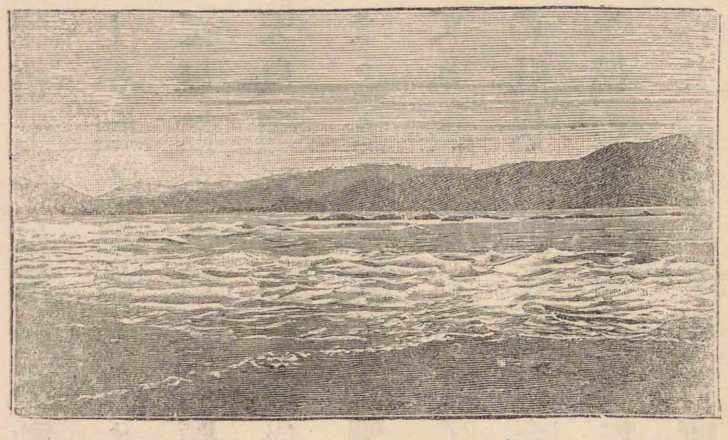
豆島などの霞みて見渡さるゝのみ。瀬より少し南に離れて、飛島とて殊に大いなる巖あり。形寶珠の如く、上には松などねぢけて生ひたり。こなたの海は扇に似て末廣に開き、阿波の椿の泊、紀伊の日の御崎など、それかあらぬかと、ほのかに認められ、碧波渺漫として果もなく、目に遮るものとては、ほのめく白帆の影のみ。近きあたりには、海士の小舟を漕ぎいでて、藻かり・魚釣りなどするもの多く、こゝの波間には、水を潛りてあさる鵜の鳥あらはれ、かしこの巖根には、翼やすむる鷗あり。山輝・水映のけしきは、雲な

き午天の陽光に、一入の匂を添へて、打見るかぎり繪にいとよくも似たりけり。もとより形勝のきこえあるこの地の、かく景趣はありながら、ただこれのみにては、ことに壯觀といふべくもあらねば、今や人々の語り聞えし言の葉も疑はれて、「早く潮落ちよかし、渦卷く樣はいかならむ。」など呟きつゝ、目たゝきもせず打守りてぞありし。

二〇　大鳴門のながめ　その三

この時早く、海山いづくともなく鳴る音して、中の瀨の巖のあたりに、潮頭の崩るゝが見え初めぬ。これぞ退潮の始りしるしとて、外洋は早く引けども、內海は遲ければ、見るく一方は高く、一方は低くなりもてゆきて、瀨戸海の水を傾けてぞこの門にあつまり來るなる。その疾きことは矢の如く、勢の凄じさは磐石の轉倒にも譬ふべきばかりにて、鎧巖をあらひ、戸崎を衝き、更に横に折れて、かくは中の瀨よりなだれ落つるなりけり。この轉變は彈指の間に起りぬれば、拙きわが筆の力に及ばず。なほうち見てあるに、水準の差は六七尺にもなりて、海峽十餘町の間

は全く瀧のさまを現し、たとへば、早川の水の網代木にせかれてたぎるに異ならず。瀬の巖の下なる深淵には、一たび落ちたる潮の、また底よりくらくと煮えかへりて、さながら鼎の沸くが如く、忽ちにして盤渦を生ず。その大きさ徑三間許りと覺え、勢は緩やかなれども、流石に怖ろしげなり。瀧の落つる事烈しければ、驚瀾・駭浪爭ひ騷ぎ、盤渦の中に入るものは跡なくなりゆけど、外にあるものは狂奔馳逐して、後浪と前浪と相及び、相鬪ひて潮頭を碎き、寄せては返し、行きては走り、輪旋すること百回にして歇まず、



大鳴門

遂に中心の凹みとなりて、又渦を作る。こは小さけれども卷くこと甚だ急にして、そのほとりには必ず逆廻せるものを作りて、ひたすら轉拗するに似たり。かくて大渦・小渦の沸涌するもの數を知らず。はては互にもみあひもみあひ、かつ現れ、且ふたがるに隨ひ、瀬なる巖の尖頂のい

よいよ露れ來れば、亂濤山の如く襲ひ進み、打越えて輾落し、今は海底鳴動して、千輛の雷車一時に震轟せしが如く、地軸も打ちひしがれんばかりなり。碎けては散る波の花、萬顆の泡珠は長空に晴雪を飛ばし、天風潮氣を捲けば、巖上の松の梢に颯々の響あり。まことに瀨戸海の潮の息、ただ半里の喉元にせまりてあへぐなれば、かくなれるも理といふべく、見る樣の壯快にして跌宕なるは鉅鹿の戰に殷聲呼んで地を撼かし、昆陽の役に百萬の兵を一擊に鏖にしたるに比ぶべくもや。蛟龍も聾駭すべく、鯨鯢も奔蹙す

鉅鹿　直隸省順德府平鄉縣にあり。

鉅鹿の戰　秦の末項羽この地に屢〻秦の軍を破る。

昆陽　河南省南陽府葉縣の南にあり。

昆陽の役　劉秀寡兵を以てこの地に王莽の大軍を破る。

べしとこそ覺ゆれ。まのあたり見る身は慄然として震ひつ、毛髮逆さまに竪ちて、そぞろ寒きほどなり。ありし小舟のいくつは、遙かに福良の方に退き、鷗などもいづ方へか隱れぬ。折しも俊鶻一羽中空を輪に舞ひて、行者が鼻なる高巖の頂に下り、翰を收めて睨視するがありけり。

時のうつりゆくまゝに奔潮はますく怒りて、射注の勢終に止むべくもあらず。下りて飛島を衝き、餘流滔々として南に下り、海中明かに一條の急川を馳せしむ。我等初の程は神驚き、心死して、面に血の色

なき迄なりけるに、漸くに自ら蘇し、闊大・卓犖の感の胸宇を衝くに方りては、豪懐物の譬ふべきにあらず。舟子に命じて試みにわが船を渦の中に入れしむ。一葉輕くして水天と抗し、掀簸上下しつゝめぐるさま獨樂にひとし。かの大渦に入るれば、一分時ならずして一旋し終り、小渦に於ても五分を出でず。渦の轉拗するにつれて、急川の裏に吐きいだされ、流に乘りて下らんとすれば、急につと漕返し、また渦に入る。かくすること幾度なるかを知らず。その間舷を叩きて天風に嘯き、骨はすでに仙せしに似たり。

沼島　淡路の南西にある島。

舟子は楫をとどめて、「今はこれ初秋の頃にして、觀潮には好き時なれど、三月の大潮には、瀧の高さ二間に近く、心も言葉も及ばぬばかりなり。われ等はよく險に慣れたれば、かゝる折を待ちて、態と舟を下す。そが潮にひかれて走るさまは飛箭の弦を離れたるが如く、四里の海路も半時ならずして流れ下り、沼島のあたりにつくべし。」などいふ。かくいふ中にも潮の勢いやましして、いつやむべしともおもほえず。豪快今は極りて悽愴の感を惹き、魂魄波に漂ひ、恍惚無有の境にさまよひて、夢とも現とも分かざりけり。

さるほどに日もやゝ西に傾きて、三時頃とも覺しき程になりぬれば、今はとて舟を南にうつしぬ。この時までありしかの俊鶻は俄かにたちて、二度三度こなたを顧みつゝ南に飛びて、いつしか暮雲の中に跡を隱しつ。船は急川の裏に入りぬれば、一瞬千里の勢にて、富士川の川船にもをさ〳〵劣らず。やゝ時を移して辛くも流の外に截りいでて帆を揚ぐるに、こゝは海面鏡の如くにて、追風さへそひければ、半時ばかりにして撫養の浦ちかくなりぬ。かなたこなた蒲帆斜に夕陽を孕みて、漁歌・欸乃の相答ふるも聞

富士川　駿河に在り、日本三急流の一。

先山　淡路國津名郡。

日蓮上人　安房の人、法華宗の開祖。

え、沼島のあたりには、紅霞一片たなびき渡りて、鳴門の海峽には、輕霧既にたちこめたり。淡路島山も、はや暮れかゝり、先山の翠は黯然として別を惜しむの色をなし、昨日杖を曳きたるあたりの忍ばるゝこそ、いとをかしかりけれ。（時文軌範）

二一　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙開第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を

唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり」と喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天闊地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の

四條金吾　本名頼基。江馬遠江守名は光時。

龍口　相模國鎌倉郡腰越津村にあり。

例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江馬遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共にもろ〳〵の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中「殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ

釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、ふりかへつて必ず殿と共に地獄に墮すべし」。との意を述べられたり。その恩愛の濃かなることと喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日もかゝさず一日に一度は必ず攀ぢ登りて、遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中にこれと比較し得べき美談あるか。

身延山　甲州南巨摩郡

にあり。今久遠寺のある所。

房州　安房國小湊村が日蓮の誕生地なり。

上人病篤くして、甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣されけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、をはりに、知

池上　武州荏原郡に在り。本門寺のある所。

波木井氏　甲斐の人、南部實長が事。身延山の地は此人が日蓮に贈りしもの。

らぬ舍人を附け候うては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈む情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。

北條時宗　時賴の長子。北條第七代の執權。

かの麗しき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲即ち刺を織る絲なるにあらずや。（樗牛全集）

二二　元寇　その一

三宅雄二郎

日露戰役の酬なりし時、朝廷は北條時宗に從一位を追贈せさせ給ひぬ。

おもふに元は國を滅すこと四十有餘、能くその呑噬を免れたるものあらざりき。しかも我一たび此と干戈を交ふるや、之を擊破してまた近海に出沒する

文永五年　亀山天皇の御代。（一九八）

こと能はざらしめぬ。元、使者を遣して好を通ずるを求め、時宗、斷乎として之を拒めり。かくて、戰端はこゝに開かれたり。此に就きて自ら三個の疑問の出づるあり。その一、拒絶は果して時宗の意志に出でしか。その二、拒絶は果して道理を具へしか。その三、拒絶は果して得策なりしか。事の跡に就きて稽ふるに、拒絶は時宗一人の志よりせしにあらず、當時彼を輔佐せし多くの人の與り關せし所にして、寧ろ國是の然らしめし所と謂ふべきのみ。初め元の我に使者を遣したるは、實に文永五年にありき。時

弘安四年　後宇多天皇の御代。（一九四）

宗年甫めて十八、余はその拒絶の獨斷ならざりしを信ず。爾後元使の相踵いで到るもの數次、十三年を經て弘安四年に至り、終に大擧して入寇す。時に時宗意氣方に旺盛、恐らくは斷乎たる決心を以て事に臨みしならん。故に一戰して元兵を屢にしたる、時宗與りて功ありとす。唯十三年間同一の方針なりしは、國論の之を致しゝものとすべし。

元の好を通ぜんことを求め、而して我の之を拒絶せしは、稍〻穩かならざるに似たれども、彼の國書を閲するに、實に我に於て拒絶するの已むべからざりしを

知るべし。その書や文辭堂々恩威竝び具る。彼必ず以て、我を心服せしむるに足ると爲しゝならんも、顧みて我が日本の歴史より察すれば、全然拒絶するの外、他に採るべき策あらず。その「問を通じ好を結び、以て相親睦せん」といへる、辭として難ずべきものなけれど、我を待つに屬國を以てし、高麗と同一視する態あるは、その語に明かなり。彼自ら何の異とする所あらざるべしと雖も、我に在りては古來未だ彼の如き不遜の國書に接したることあらず。怒らざらんと欲するも豈能く得んや。當時彼の國書を覽し者、一として書辭の不遜なるを咎め且憤らざりしは無かりしならん。國土面積の廣狹相懸隔するの著しきをおもひて、國力を誤信せし者は、成るべく圓滑に局を結ばしめんとして開戰に躊躇したらんも、理非は既に明白なりしなり。元主使者を派して我を促し、我之を斬りて首を梟せしかば、その怒りて兵を發し入寇せしもの、彼に在りて已むを得ざりし所ならん。則ち已むを得ざりし所ならんと雖も、その此に出でたるは、もと我が國情に通ぜざりしが爲のみ。若し能く我が國情に通ぜしならんには、決して

高麗　今の朝鮮なり。

不遜の國書　高麗朕之東藩也。日本邇二高麗一、開國以來、時通二中國一。至二於朕身一、無三一乘之使以通二和好一、尚恐國王知之未一也。故特遣レ使持レ書、布二告朕心一。自今以往、通レ問結レ好、以相親睦。且聖人以二四海一爲レ家、不二相通好一、豈一家理乎。以至レ用レ兵、夫孰所レ好乎。王其圖レ之。（國書節錄）

此に出でざりしなるべし。彼既に戰を開くに決し、十餘萬の大軍を發して入寇す。一夜颶風俄かに起り、兵船多く覆沒す。我が兵之に乘じて襲擊し、殆ど之を殲滅せり。乃ち言ふ者あり、「當時若し颶風の起らざりしならば、我が國運或は危殆に瀕したりしならん」と。言者の說にして當れりとせば、則ちかの開戰に決せしは策の宜しきを得ざりしものと謂ふべけれど、而もその言ふ所や實に謬れるの甚だしきものにして、我が開戰に決せしは必勝の算ありしなり。假に颶風起らずして、彼の陸兵みな上陸し得たりとせば、彼我の勝劣則ち如何。元史に據れば、彼の兵數二十萬と號す。數に於て少からざれど、かばかりの軍隊を以て能く日本征服の功を擧げ得べきか。

二三　元寇その二

元の時代は支那古今を通じて造船術の最も發達せし時といはれ、我に寇せし兵船は閣龍の亞米利加發見に用ひしものより、尙堅固なりきと傳へらるれど、その颶風に遭ひて多く破壞せしに觀るも、以て略構造の如何を察するに足らずや。彼累りに諸邦を征

服せしも、かく多數の兵船を運用せしことは曾てこれ無し。また彼が操船に巧なりしかも疑なきを得ず。既に十萬・二十萬の軍隊を送遣せし後、猶絶えず兵站の連繼を過たざること、果してその能くするを得る所なるか。糧を敵に因るの心算なりきとするも、全軍を支ふるに足るべき食料を徵發するは、頗る困難の業ならずや。若し我に於て、手を拱きて彼の欲するがまゝに從ひしならば、或は徵發に依りて全軍を給養し得たるべきも、これ到底望みて得べからざる所ならずや。

糧を敵に云々

孫子作戰篇に「善用レ兵者、役不二再籍一、糧不二三載一。取二用於國一、因二糧於敵一。故軍食可レ足也」

曾に軍隊給養の難きのみにあらず、彼我交戰の結果、彼また勝つべからざる運命ありしなり。承久の亂、北條氏の兵畿内を指して西上せし者十九萬人、若し此に關西の兵を合せば、數に於て優に元兵の上に出づるを得しや必せり。加ふるに、我は地理に精しく、便利を占むる事亦多し。十萬・二十萬の元兵を擊摧するに於て何か有るべき。戰亂を見ざること五十餘年に亙りしと雖も、國を擧げて武門の治を享け、未だ嘗て一日も武を練るを怠らず。爾後久しきを經ずして、天下麻の如く亂れ、數百年間唯戰爭をこれ事

承久の亂

仲恭天皇の承久三年。（一八一）

伊太利の人。元の世祖忽必烈汗に仕ふ。Marco Polo

とせしもの、決して偶然なりとせず、當時この鬱勃たる士氣を以て元兵に對す、之を殲滅するは寧ろ易易たりしなり。且マルコ、ポーロの記する所に據れば、元兵の大敗せるもの、兩將の不和に由りしが如し。我が軍の士氣旺盛なるを以てして、彼が主將の不和なるに加ふる、單にこれのみを以てするも勝敗の數既に明かなりとすべし。如何なる點より察するも、我、彼を殲滅するの理ありて、彼、我を征服するの恐なし。我の斷々として拒絶せる決して無謀の擧にあらず。神風の加護に賴りて幸に勝ちたりと思惟するが如きは謬想に過ぎず。

龜山上皇の御身を以て國難に代らんと祈らせ給ひしはいともかしこし。既に上皇の御身を以て國難に代らんとし給ふを目睹す、國内の民誰か奮つて國に殉ぜんとせざらん。之がために上下擧りて國難に當らんとの決心を固めたるや疑ふべくもあらず。元兵にして上陸し、隊を整へて東進し來りしとせんか。乃ち我が兵の如何に勇を鼓して邀擊せしかは知るべきなり。その海上に於けると同じく、之を陸上に鏖殺したるや必するに難からず。颶風の起り

しは幸といふよりも寧ろ不幸といふべし。元兵にして上陸したらんには、我初め多少の苦戰あらんも、終に全勝を制し、更に勢に乘じて高麗を略し、かくて漸く醞釀せる國内の紛爭を移して、外地の經略を事としたりしなるべく、爲に我が日本の獨り較著なる發達を遂げしのみならず、東洋全

元寇記念像

體亦大に進歩の見るべきものありしならん。颶風起りて戰はずして勝ちしより、竟に武を海外に用ひず、徒に國内の紛爭に忙殺せらるゝに至りしは、洵に遺憾の極といふべし。

元は一敗して後更に再擧を圖らんとせしが、諫むる者ありて遂に止めり、智とすべきなり。この一役に於てだに海岸到る處に造船の音喧しく、爲に費しゝ所莫大の額なりきと傳ふ。故を以て若し一敗に懲りずして再擧を圖り、一層の準備を整へて我が國に來寇せしならば、國力の底を傾くるに至りしは疑ふ

べからず。何ぞ八十年後に分割せらるゝを待たんや。（小泡十種）

二四　浮島原の對面

佐殿は善惡に騷がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、「さらばこれへおはしまし候へ。見參せむ。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司も共に聲を呑みて泣き給ふ。

佐殿　右兵衛佐源頼朝。
彌太郎　堀彌太郎。
御曹司　部屋住の公達の事。こゝは源義經。

互に心のゆく程泣きて後、佐殿涙をおさへて、「さても頭の殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候ふ時、見奉りしばかりなり。頼朝池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて伊東・北條に守護せられ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向のよしは、幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと、申しつくしがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てゝ候へ、八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれ

頭の殿　左馬頭源義朝。
池の尼　平忠盛の後妻。平清盛の繼母。平頼盛の實母。
伊豆の配所　田方郡蛭が島。
伊東　名は祐親。
北條　名は時政。
奥州　今の陸前・陸中・陸奥。秀衡は陸中磐井郡平泉に居たり。

ば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり、賴朝自身すすみ候へば、東國おぼつかなし、代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし。他人をのぼせんとすれば、平家と一つになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戰に御弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、賴朝が只今の心にいかでかまさるべ

八幡殿　源義家。
刑部丞　源義光。

き。今日より後は、魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めむ。」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て大名小名たがひの御心おしはかりて、みな袖をぞぬらしける。

しばらくありて御曹司申されけるは、「仰のごとく、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらむ。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參りて、十六までかたの如く學問を仕り、さては京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候ふ間、

奥州に下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳せ参る。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見参に入り候こゝちしてこそ候へ。身をば君に進らする上は、いかゞ仰に從ひ参らせでは候ふべき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。（義經記）

秀衡　藤原氏。陸奥出羽の押領使。基衡の子。

新玉の年　安德天皇の養

二五　空ゆく雁

新玉の年立ちかへり、一萬は九つ、箱王は、七つにぞなりにける。ある夕ぐれ、箱王は、母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父は、いづくにおはしますぞや。その佛は、何處にましますぞや。往きて、をがみたてまつらばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたるこしかたも、今更おもひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母、泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ、おのれ等が父にてあれ。」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて、陳じやる方ぞなかりける。

箱王、かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ、『狩

和元年。一萬・箱王　工藤家次

祐家　祐經

祐親

祐泰

祐成（一萬）　時致（箱王）　祐經

母　名は滿江。祐泰の死後、曾我に再嫁す。曾我殿太郎祐信。

工藤一藤 即ち祐經。
鎌倉殿 源頼朝。
この里 相模國足柄下郡曾我中村。

場より歸り給ふ道にて、工*藤一藤とやらむに射られ、死にたまひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時、鎌*倉殿のきり者にて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より、鎌倉へ上る時もありとや。　われらをも殺さむとや思ふらむ。　われらが、この*里に在りと知らでや過ぐらむ。』など、おとなしく語りければ、母よりはじめて、女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月、隈もなかりけるに、兄弟二人、庭に出でて、遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの、南をさして飛びけるを見て、一萬申

河津殿 即ち祐泰。

しけるは、『あれ見給へ、箱王殿。　空を飛ぶつばさも、皆、別の翼ぞまじへざりける。　五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。　われらは、人倫にうまれながら、和殿は弟、我は兄、母は、まことの母なれども、曾我殿は、實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。　父だにも、世におはしまさば、馬鞍をも賜り、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。　われ〳〵より幼き者にても、馬鞍、弓矢をもて、物を射ありく〳〵

との羨しさよ。　これらの事ども思ひ續くれば、いつより、今宵は、父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔をさし入れて、さめ〴〵と泣きければ、弟も、こざかしく、顔をあはせて泣き居たり。　一萬の乳母の女房、これを聞きて、「あなあさまし。　人もこそ聞け。いかに和上萬達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。　とく〳〵入らせ給へ。」と、怖ろしげにいひければ、二人のものは、門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りけり。

或時、兄弟は、竹の小弓に、薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬、箱王に申しけるは、「われらも、いつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如く、さし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。　和殿も弓よく射習ひ給へ。　われも射習はむ。　弓矢は、男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて、領掌しけり。　年ばへには、怖ろしきことかなと、人々思ひけり。

一萬が乳母、此のよしを聞知りて、大きに驚きて、母に

伊東入道
祐親。
千鶴御前
母は祐親の女。
松河が淵
伊豆國田方郡伊東にあり。

かくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く〳〵語られけるは、「實か、おのれ等が、さも怖ろしき謀叛を起さむと議しあふなるは。もし、人の耳に入りなば、よかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を、松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において、失はれ給ひぬ。おのれ等、かゝる謀叛人の孫なれば、敵左衞門尉、上の御敵に申しなして、失はるべし。その時、千度百度悲しむともかなふべきか。そのうへ、汝等が、鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申して、

石橋山
相模國足柄下郡にあり。
石橋山の戰
治承四年八月なり。（一八四〇）
土肥の杉山
相模國足柄下郡土肥の山谷、石橋山の南にあり。
梶原景時
頼朝の寵臣。

とどまりたり。その故は、鎌倉殿、石橋山の合戰に打負けて、土肥の杉山へ入らせたまひし時、梶原景時と曾我殿と二人、心をあはせて、助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼き者どもを助けて給らむ。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。』と仰せられける故にこそ、汝等も安穩にて、今まで希有の命を保ちたるぞ。其につきても、曾我殿の芳恩をば、生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類・畜類にても、恩を知るとこそ聞け。況や汝

等人倫においてをや。然るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返すがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速かに謀叛をとどむべし」と口說きたてゝ、誡められければ、二人の子供、目と目とを見あはせ、顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては、内々談議しけれども、人目に顯れては、語り合ふこともなし。母も、内々怖ろしき者どもの心樣かなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれける。（曾我物語）

金剛寺　河内國南河内郡天野村大字下里にあり。

二六　松葉仙人

河内國金剛寺*とかやいふ山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀を食はねども苦しみなし。能く食ひおほせつれば、仙人ともなりて飛びありく」といふ人ありけるを聞きて、松の葉を好みくふ。誠に食ひやおほせたりけむ、五穀の類食ひのきて、漸く兩三年になりにけるに、げにも身も輕くなる心地しければ、弟子どもにも「我は仙人になりなむとするなり」と、常はいひて、今々とて、内々にて身を飛び習ひなどしけり。「既に飛びてあがりなむ」といひて、坊も何も弟

子どもに分ち讓りて、「上りなば仙衣をきるべし」とて、かたの如く腰に物をひとへ卷きて、出で立つに、「我が身には、是より外は入るべきものなし」とて、年比秘藏して持ちたりける水瓶ばかりを腰につけて、既に出でにけり。

弟子・同朋、なごり惜しみ悲しび、聞きおよぶ人、遠近市の如くに集りて、仙に登る人見むとてつどひたりけるに、この僧、片山のそばにさし出でたるいはほの上に登りぬ。一度に空へ登りなむと思へども、近く先づ遊びて、事のやう人々に見せたてまつらむとて、「か

の巖の上より下に生ひたりける、松の枝に居てあそばむ」といひて、谷より生ひのぼりたる松の上、四五丈ばかりありけるを、さけさまに飛ぶ。人々目をすまし、哀をうかべたるに、いかゞしつらむ、心や臆したりけむ、かねて思ひしよりも、身重く力うきくとして弱りにければ、飛びはづして谷へ落入りぬ。人々あさましく見れども、これほどの事なればやうあらむ、定めて飛上らむずらむと見るほどに、谷の底の巖にあたりて水瓶もわれ、又我が身も散々に打損じて、只死にに死にぬれば、弟子・眷屬騒ぎ寄りて、「いかに」と問

へば、いらへもせず、僅かに息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入れつ。こゝに集れる人笑ひののしりて歸りけり。

さてこの僧、あるにもあらぬ樣にて、痛み臥せり。とかくいふばかりなくて、弟子も恥しながらあつかふあひだ、松の葉ばかりにては、命生くべくも見えねば、年ごろいみじく食ひのきつる五穀をもて、さまゞいたはり養へば、命ばかりは生くれども、足・手・腰もうち折りて、起居もえせず。今は松の葉食ふにも及ばず、本の如く五穀むさぼり食ひて、弟子どもにゆゝしく讓りたりし坊も寶も取返して、かゞまり居たり。

文集　白氏文集。唐の白樂天の詩集なり。

苟も金骨の相云々　神仙信有レ之、俗力非レ所レ營、苟無二金骨相一、不レ列丹臺名。（白氏文集）

唐玄宗　第六世の天子。即位後政治を勵みしが、後奢侈を極む。

西王母　支那傳說中に在る仙人の名。列仙傳には此の事を漢の武帝の時となせり。

仙道にいたる人、たやすからぬことなり。文集には「苟も金骨の相なくば、丹臺の名を期しがたし」とこそ書かれはべれ。唯松の葉を食ひならひたるばかりにて、左右深き谷へ向ひて飛びけるこそ、誠に慮なけれ。但し唐の玄宗の宮に、西王母といふ仙女參りて、仙桃を七つ奉れりけるを、「この種を我が宮に移さむと思ふ」との給はせたりければ、王母うち笑ひて、「天上の菓人間に留り難くや」と申して、はかなげに思ひ奉りけり。帝だにもかく愚におはしましければ、この

僧仙を得たりと思ひて、未得謂得の心をさなかりけるもことわりなり。（十訓抄）

大正國語讀本（修正版）卷五終

大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行
大正七年九月廿六日修正印刷
大正七年九月三十日修正發行
大正七年十二月十二日修正再版印刷
大正七年十二月十五日修正再版發行

大正國語讀本修正版
全拾冊
定價
卷一・二　各金三拾四錢
卷三・四　各金三拾錢
自卷五至卷十　各金三拾錢

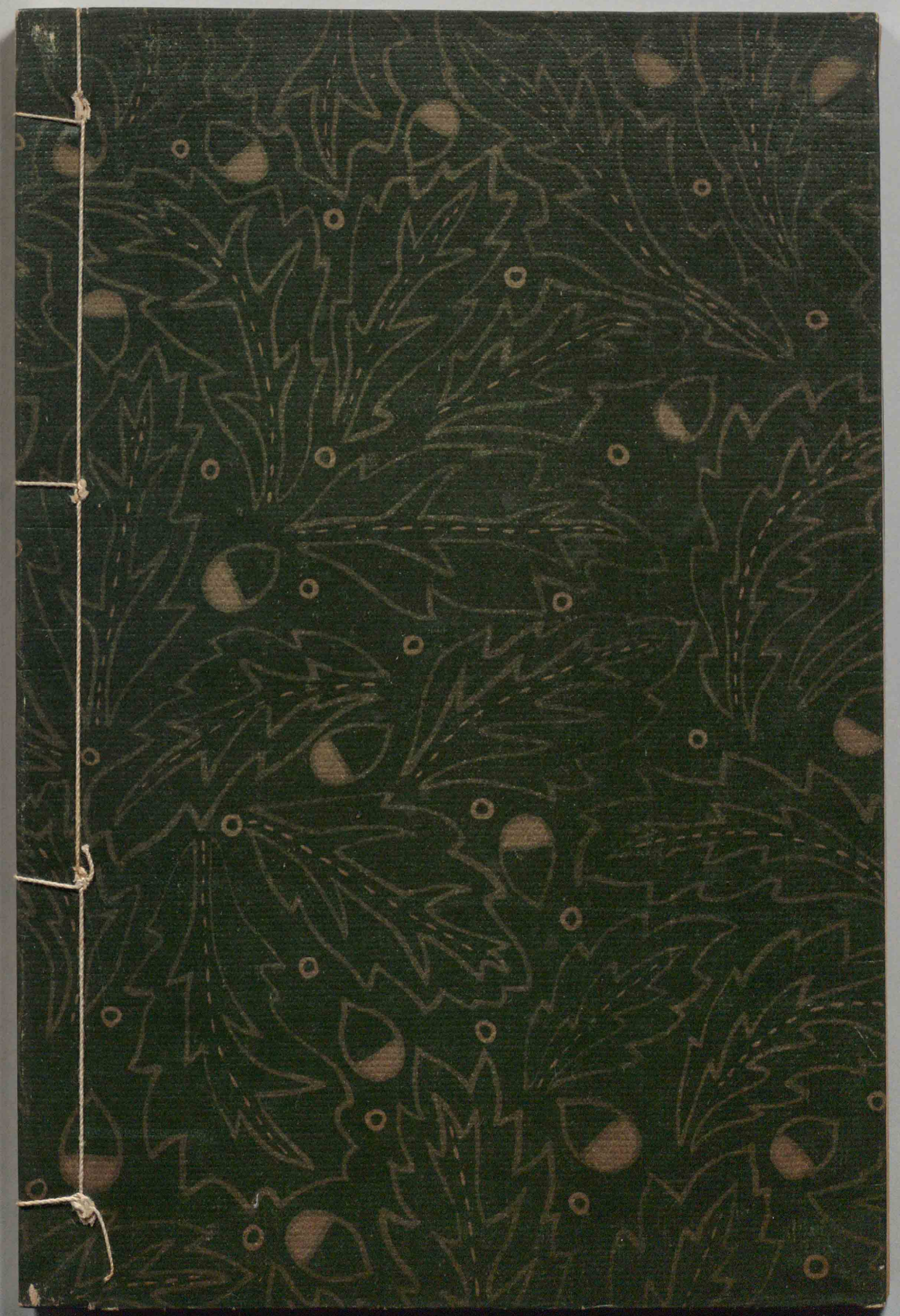
著作權所有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一

發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院

發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店